

なくそのうちに数えられ、現代世界における最も優れた印欧語古典文献学者の一人だと言える。氏の一層のご健勝を祈念する次第である。

Jay M. Hammond, J. A. Wayne Hellmann and Jared Goff (eds.),
A Companion to Bonaventure,
(Brill's Companions to the Christian Tradition, vol. 48),
Brill, Leiden/Boston, 2014, pp. 588

松 村 良 祐

本書は、Brill から出版されているシリーズ *Companions to the Christian Tradition* の中の一冊である。このシリーズは、中世から近世にかけてのキリスト教史上の人物や思想を主題とした論文集であり、中世の神学者（大グレゴリウスやエックハルトなど）に関するものや、ルネサンス期の天文学、中世後期のアリストテレス注解といった特定のテーマを取り上げたものが既に出版されている。また、本書の主たる編集に当たった Jay M. Hammond と J. A. Wayne Hellmann は、共にセントルイス大学で教鞭を執る同僚であり、ボナヴェントゥラのみならず、アッシジのフランシスコをはじめとする初期フランシスコ会の活動に精通した米国を代表する研究者である。

ところで、ボナヴェントゥラに関する研究は、20 世紀初頭のクアラッキ版の刊行以来、多くの重要な研究が着実に積み重ねられてきた。わけても特筆すべきであるのは、J. G. Bougerol (ed.), *S. Bonaventura 1274-1974* (Grottaferrata: Collegio S. Bonaventura, 1973-1974) と A. Pompei (ed.), *San Bonaventura Maestro di Vita Francescana e di Sapienza Cristiana* (Roma: Pontificia facoltà teologica san Bonaventura, 1976) の二編である。ボナヴェントゥラの没後 700 周年を記念して出版された上記二つの論文集は、併せて 200 本を超える論文を収録し、ボナヴェントゥラ自身の思想以外にも、文学作品や絵画、政治思想史の中に登場するボナ

ヴェントゥラに光が当てられ、多様な領域を巻き込んで展開される学際的なボナヴェントゥラ研究の姿を浮かび上がらせている。本書は、そうした記念碑的な論文集の出版から40年余りが経過しようとする今日において、ボナヴェントゥラ研究の現状を確認し、更なる研究の可能性を開示することを目的としている。

さて、本書は以下の三つの区分のもとに全15編の論文から構成されている。すなわち、その第一はボナヴェントゥラの生涯やテキストに関する伝記的・文献学的研究であり、第二はボナヴェントゥラの聖書注解や天使論、キリスト論などの神学に関する研究である。そして、第三はボナヴェントゥラの説教、フランシスコの生涯を描いた二つの伝記（『大伝記』『小伝記』）、フランシスコ会総長としてのボナヴェントゥラの活動といった司牧的側面に関する研究である。編者が序文で述べているように、これら諸論文の多くがボナヴェントゥラの没後700年より後の若い世代の研究者らの手によるものであることも本書の特徴のひとつである。ここで、上記の三つの区分の内に収められている論文の幾つかを取り上げることで、ボナヴェントゥラ研究の現状を紹介することにした。

第一に、伝記的・文献学的研究を取り上げてみると、まず冒頭の論文 M. Schlosser, “Bonaventure: Life and Works” では、ボナヴェントゥラの生涯とその主要著作の概観がフランシスコ会内外におけるその後の受容史と共に丁寧に纏められている。ボナヴェントゥラ受容は、その死後早い時期にドミニコ会の教義の礎に置かれたトマスとは異なり、『三様の道』や『魂の神への道程』などの神秘神学的著作を中心とした限定的なものであり、そうした彼に再び注目が集まったのは、フランシスコ会から分派した17世紀のカプチン会によるところが大きいとされる。続く P. Maranesi, “The Opera Omnia of Saint Bonaventure: History and Present Situation” では、1588年のヴァチカン版からクアラッキ版の刊行に至るまでのボナヴェントゥラ全集の出版の歴史が説明された後で、クアラッキ版に存在する問題の現状 (status quaestionis) が確認されている。クアラッキ版は、それ以前の全集には知られていなかったボナヴェントゥラの著作（『キリストの知について』や『三位一体の神秘について』など）を新たに収録するという点で画期的なものであるが、そこには偽作の疑いが依然として残るテキストや、研究の進展と共に批判的校訂版の必要が生じてきたテキストが存在している。Maranesi はクアラッキ版に収録されているテキストを真偽性の度合いや批判校訂版の必要性といった観点から分類・整理しているが、こうした最新の研究成果

と共に行われるクアラッキ版の検証はボナヴェントゥラのテキストを手取る上で貴重な示唆を与えてくれる。また、同論者による P. Maranesi, “Bonaventura of Bagnoregio: A Transcription of Collatio III of Hexaëmeron,” *Franciscan Studies* 53 (1993): 47-78 は、1984 年に発見された『ヘクサエメロン講解』の写本をもとに同様の問題を取り扱ったものであり、併読することで、クアラッキ版を巡る問題点と今後の編集の方向性がより明瞭になると思われる。

第二に、神学に関わる研究において、D. Keck, “Bonaventure’s Angelology” ではボナヴェントゥラの天使論に焦点が当てられている。最初に、ボナヴェントゥラの天使論の源泉やその大枠が論じられた後で、天使とフランシスコの関係が問われている。ボナヴェントゥラはフランシスコを「セラフィム」や「平和の天使」「第六の天使」に擬えるが、この論文ではそれらの一つ一つがその背景と共に説明される。例えば、「第六の天使」は『黙示録』(7.2-4) に起源を持ち、七つの封印の内の第六番目—すなわち、新約以降の七つの時代の内の第六の時代—が開かれるときに現れる天使のことであるが、ボナヴェントゥラはフランシスコをこの「第六の天使」に擬えることで、彼が現在の教会の窮境を正し、その刷新が行われる第七の時代へと導く者であることを示そうとする。こうしたフランシスコと天使の結び付きは、アルヴェルナ山でのセラフィムの顕現を背景としつつも、托鉢修道会論争、つまりフランシスコとそれに続くフランシスコ会の自己規定という問題の中で展開される。また、J. Benson, “The Christology of the *Breviloquium*” では『神学綱要』がキリスト論という視点から読み解かれている。ボナヴェントゥラのキリスト論というテーマは Z. Hayes や E. Cousins の関心を引き継ぐものであるが、この論考の新しさは、初期の『命題集注解』と後期の『ヘクサエメロン講解』の間に挟まれ、余り注目をされてこなかった『神学綱要』に光を当て、キリストの受肉がこの著作全体の構成・内容上の中心に置かれていることを示そうとしている点にある。

第三に、司牧的側面に関する研究において、T. J. Johnson, “The *Legenda Minor*” と J. M. Hammond, “Bonaventure’s *Legenda Major*” の二本の論文は、ボナヴェントゥラによって著されたフランシスコの伝記を共に問題にしている。最初の Johnson の論文では、これまでの諸研究において『大伝記』の影に隠れ、その簡約本として評価されるに過ぎなかった『小伝記』が取り上げられている。Johnson によれば、『小伝記』の各章は、朝課から終課までの一日の聖務日課に

合わせた小区分から構成されており、この書物の各部分がフランシスコ会の修道院の各時課に朗読されていたことを窺がわせる。とりわけ、この『小伝記』には『大伝記』と比較して光や暗闇といった表現が多く用いられており、当該箇所が朗読される時課との間に或る種の対応が見られるとされる。視力が衰え、暗闇の中で没したフランシスコが神の大いなる恩寵の光の中で天に挙げられたという『小伝記』の一節が夜明け頃に行われる朝課の視覚的イメージに合致するように、『小伝記』は『大伝記』の単なる簡約本ではなく、日々の聖務日課との関わりにおいて読み解かれるべき書物であると結論される。次いで、本書の編者の一人である Hammond の論文では、特に『大伝記』中盤の章に焦点が当てられる。この『大伝記』は、序盤と終盤でフランシスコの生涯が描かれ、中盤に会則とフランシスコの持つ諸徳を主題にした章が置かれている。とりわけ、フランシスコの持つ徳について書かれた9つの章は浄化・照明・一致という霊的上昇の過程であり、この中盤部分は、読者が会則を理解し、霊的生活を通じて徐々にフランシスコへと近付いていくためのプロセスとして読み解くことが可能であると言う。ボナヴェントゥラによるフランシスコの『大伝記』は聖霊・修院両派のフランシスコ像を混ぜ合わせた曖昧模糊としたものではなく、ボナヴェントゥラ自身の神秘思想を土台とした上で、「生の模範」としてのフランシスコ像を読者に提示したものであったとされる。

また、D. V. Monti, “Bonaventure as Minister General” は、フランシスコ会総長としてのボナヴェントゥラの活動に焦点を当てた論文である。周知の通り、ボナヴェントゥラはパリ大学神学部教授であった1257年、前任者バルマのヨハネスによってフランシスコ会の第7代総長に指名される。Monti は、この論文の中で、その後の17年間に及ぶフランシスコ会総長としてのボナヴェントゥラの活動に焦点を当て、彼が果たした役割を「優れた統一者」として総括している。当初、フランシスコ会は一切の財産や法的権利も持たない観想と説教を旨とする人々の集まりとして創設された。しかし、フランシスコの死後、この会が急激に拡大し、彼の個人的な霊性だけでは維持し難くなったとき、巨大化した会を制度的に整備する必要性が生じてきたのである。そうした中で、ボナヴェントゥラは言わば「第二の創設者」として会が進むべき方向を新たに提示したわけではなかった。むしろ、彼はこれまでに作られた会則や諸規則を整理し、それらの編成に整然とした秩序を与えると共に、フランシスコの伝記の執筆や托鉢修道会論争を

通じて、フランシスコ会をその内外において実際に整えていったのである。

さて、以上に、本書において展開される三つの区分から幾つかの論文を取り上げ、ボナヴェントゥラ研究の現状について紹介した。これら数編の論文の紹介からも窺い知ることが出来るように、本書は、これまで余り注目を浴びてこなかった領域に光を当て、今後のボナヴェントゥラ研究の可能性の一端を示すことを目的としている。編者らの序文によれば、マリア論や神学的人間論に関する論文の収録も企図していたようである。もっとも、本書に収録されている 15 編の論文によって、ボナヴェントゥラ研究の可能性が開示し尽くされたわけではない。A. Speer, "Bonaventure and the Question of a Medieval Philosophy," *Medieval Philosophy and Theology* 6 (1997): 28-29 に述べられているように、ヘールズのアレクサンデルやサン・ヴィクトル学派からの影響、『十戒講話』をはじめとする後期著作を通じてのアヴェロエス主義に対する態度、といった点も今後のボナヴェントゥラ研究の課題として残されている。とはいえ、ボナヴェントゥラ研究は昨今において目覚ましい進展を見せており、今後においてその全体像が一層明瞭なものとなっていくことが期待できるだろう。